

## <これからの教育の課題>

### <生の体験 — 自然に触れるということ。>

私が「情報化社会と若者」という題をつけましたのは、若い人がそういう情報化社会のなかで生きていくうえで、どうしたらいいのか、助言するなり、教育するなり、彼らに方向を示してあげなければいけないと思うからです。そこで非常に重要になってくるのは、私どもが持っていて今の若い人は持っていない「環境」ではありますが、それは「生の体験」だと思います。

『農政白書』の中に、実体験のない子どもと、実体験のある子どもに聞いた道徳観の有無が、歴然ときれいに平行するというグラフが載っていました。つまり、生の体験がない子どもほど、自分のなかに社会的な道徳観がない。これは当たり前なのです。情報処理というのはまったくのニュートラルで、先ほどから言っているように、情報とは基本的に石ころだからです。



どんな殺人事件でも、文字になってしまえば、情報化された犯罪として、まったく中立化してしまいます。中立化された情報だけに浸かっていると、そこには善悪も感情も何もありません。若い人の凶悪な犯罪、極端な行動がよく報道されます。私は新聞紙上で指摘したことがあります。実は、殺人が問題なのではなくて、身体の誤った扱いが問題なのです。神戸の酒鬼薔薇事件という有名な事件では、顔見知りの小学生を殺して、首を切って校門の前に置いた。首の切断なんて、そういうことをしているのは解剖医だけ、とは言いませんが、「身体の扱い方が間違っているな」という感じがいたします。

その異常さは、基本的に自然がわかっていないことに原因がある。自然とは、つまり「人がつくらなかったもの」という意味です。私たちが生活するうえで、1日に人のつくらなかったものをどれだけ見るかと考えてみてください。どれだけそれに触れるか。現在の東京をご覧になればわかりますが、まずほとんど触れない人が多いだろうと思います。

日常生活を考えてください。昔は、飯を炊くのはお釜でした。ところが今は、ご飯を炊くのも、ボタンを押せばお終いですし、今の風呂はボタンさえ押せばお湯が入り、湧き上がったら知らせてくれる。テレビのチャンネルは、リモコンのボタン操作でどんどん変わる。要するに、われわれがつくっている世界は「ボタン世界」なのです。そういう世界をつくったのは大人です。子どもはテレビゲームのボタンを苦もなく操り、それで世界が変わっているいろいろなことが起こる。あれは、大人社会に適応するために非常に重要な前段階とも見えます。だからテレビゲームの普及はべつにたいして問題ではありません。ただ、バランスのとれた人間として生きていこうとするならば、「生の体験」を同じように与えてやらなければいけない。それが私の持論です。

私の世代は両方を体験してきました。子どもの頃は田んぼや畑で遊び、身近に牛や馬がいるような日常性のなかで育ち、長じては車にも乗ればパソコンも使える。今の子どもは、いわばわれわれの世代の「ゴール地点」からスタートしているわけで、彼らはわれわれが「スタート地点」としたところへと、逆に向かっていかななくてはならないのではないかと。まずパソコンや電気機器のある日常から入って、自然体験が後になる格好です。牛馬がいる環境、森の中を歩いていたらへびを踏んづけるかもわからないような、そういう自然環境へと、今度は放してやらないといけません。そういう自然体験をしていくことで、やっと人間として釣り合いがとれると思うのですが、学校ではそういうことを教えません。初めから情報の世界に入れ込まれてしまっている若者たちに、どうやって反対側のもつ——つまり自然を身につけてやるか、これが、これからの教育の課題であるという気が私はしております。

<「情報化社会と若者」より>

### <人物紹介>

養老 孟司(ようろう たけし)

1937(昭和12)年、鎌倉生れ。解剖学者。東京大学医学部卒。東京大学名誉教授。心の問題や社会現象を、脳科学や解剖学などの知識を交えながら解説し、多くの読者を得た。1989(平成元)年『からだの見方』でサントリ学芸賞受賞。新潮新書『バカの壁』は大ヒットし2003年のベストセラー第1位、また新語・流行語大賞、毎日出版文化賞特別賞を受賞した。大の虫好きとして知られ、昆虫採集・標本作成を続けている。